米欧亜回覧

第８９号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集委員会

「グランドシンポジウム」の出版、二年ぶりに成る
記念講演会と祝賀パーテイ、二月一四日に開催

二〇一六年一二月二日から四日まで、神田一ツ橋の学術総合センターで行われた、当会設立二十年記念のグランドシンポジウムについては、その後、泉三郎代表を責任者に小野博正、山田哲司、塚本宏氏を編集委員として作業がすすめられていたが、その記録が二年の歳月をかけて、二冊の本として出版されることになった。

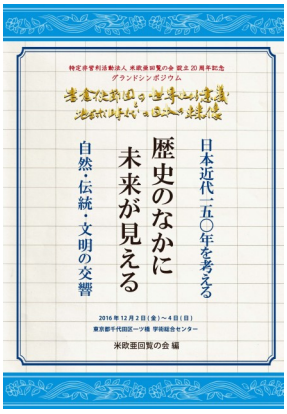
「岩倉使節団の群像―日本近代化のパイオニア」と題するミネルヴァ書房版については既に前号のニュースで予告記事を掲載したが、その姉妹本として当会本が刊行のは運びになったので、この催事が企画されたのである。

挨拶をする泉代表

二月十四日（木）、日比谷公園にある日比谷図書文化館において、満員の会場で行われた。一部は五階のホールで、国学院大学教授の坂本一登氏を招き、「岩倉具視―幕末維新期の調停者」の講演が行われた。昨年、NHKの大河ドラマ「西郷どん」で笑福亭鶴瓶が「怪人・岩倉具視」を演じて話題になっただけに、最新の研究成果を踏まえての講演は興味津々であり、「その実像はいかに？」と参加者は熱心に聴き入り、質疑応答や意見も活発に交わされて意義深い内容となった。

また、祝賀パーテイは地下にある会場で行われ、一月に先行出版されたミネルヴァ本「岩倉使節団の群像」について、読後の感想や執筆者の感慨も含め様々な発言があり、また、岩倉使節団の群像のご子孫も多数来場されて話題は広がり、大盛会のうちに終了することができた。

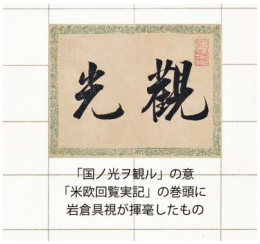
（詳細は二頁）



歴史のなかに未来が見える～
岩倉使節団と日本近代一五〇年

写真は、当会刊行のグランドシンポジウム報告書の表紙である。裏表紙には中央に岩倉具視の揮毫による「観光」の字がデザインされ、背表紙には「岩倉使節団と日本近代一五〇年」と印字されている。版型はB5、二段組、二二三頁であり、三月一日には発行された。

内容は報告書形式で、序の部は三日間の情景を伝えるフォト・ドキュメント、一部は初日の要約、二部は二日目の「日本の近代一五〇年を考える」の全記録、三部は三日目の「日本の未来像」を主に構成され、最後に当会の二〇年の活動年表が付されている。



裏表紙

「岩倉使節団の米欧亜大旅行」
七か国語に乗って世界へ！

泉　三郎

萌出る若葉の風そよぐ、令和元年五月某日、岩倉使節団の大旅行が、世界の近代史のなかでも特筆すべき事象として、七か国語で世界中に紹介されることになった。

「日本の”今”を、広く、かつ深く、七つの言語に乗せて世界に伝えたい」という趣旨の公益財団法人ニッポンドットコムのサイトに掲載されることになったからである。それは年中休みなく日々，五本くらいの記事から構成されるグローバルなサイトであり、一か月間に五〇〇万人が見にくるといわれている。

その主宰者nippon.comとはどんな団体か、どんな使命を帯びているのだろうか。そのHPから引用させてもらえば次の通りである。

「二〇〇〇年の継続と、絶え間のない異文化への適応を見せてきた日本の文化と伝統、その最先端における文化を伝えます。伝統とモダンのはざまに、私たちはいつも揺れるものですから。（中略）私たちは、英語、中国語（簡体字、繁体字）、フランス語、スペイン語、アラビア語、ロシア語そして日本語一七つの言葉を自在に操る専門家の集まり。真正面に見据えるのは、世界に広がる七〇億人を超すオーディエンスです。」

この二月、ミネルヴァ書房刊の「岩倉使節団の群像～日本近代化のパイオニア」が目に留まり、原稿依頼が舞い込んだのだ。編集の首脳陣に世界に伝える価値ありと認められたということになる。

さて、一八世紀に西洋で始まった大科学技術の革新、交通通信と産業の革命が、非西洋社会へ及ぼした影響を計り知れないものがある。その西洋文明の衝撃に、果敢にチャレンジした最初のモデルが日本であり、その最もテイピカルな冒険的な事象が岩倉使節団であったという認識でありましょう。まさにその通り・・・こんなに興味ある話は他にありません。

この三〇〇〇字ばかりの小文は数枚の写真や小さな地図と共に、三大オーシャンを巡り五大陸や数々の島嶼に伝わり、各地の町や村で小さな波紋を起こし、あるいは渦を巻き起こしてくれるかもしれません。

出版記念講演会
『岩倉具視の実像―最新の研究を踏まえて』

講演要旨

岩倉具視の研究は、戦前の徳富蘇峰の『岩倉伝』と、戦後は大久保利謙氏の先行研究があるが、幕末が中心で明治以降の研究は意外に少ない。天皇中心の列強対抗国家を創った人と思われ、人気が薄くなったようだ。

岩倉の人生は、下級公家・堀河家出身で、やはり下級公家の岩倉家養子となり、ペリー来航の一八五三年に鷹司政通の歌道の弟子となったのが二九歳の遅いデビュー（人生五〇年時代）。三四歳、佐幕派公家に反対する八八人列参を主導し、孝明天皇の近習となり、和宮降嫁の行列団長となる早い出世。四奸二嬪の排斥運動による岩倉村蟄居（五年間）の長い隠棲で特徴づけられる。

王政復古の小御所会議当日に、やっと公職復帰した。その会議で慶喜不在に怒る山内容堂を一喝したとの神話があるが、資料に乏しい。明治六年の政変で、岩倉の変節をよく言われるが、若いときの『神州万歳堅策』で、外遊して西洋文明（敵）を知るべきだと述べており、岩倉使節団は彼の本来の考えと言える。岩倉使節団の意義は、旅での共通体験がその後の政権を担う諸士と共通のイメージを得たことが大きい。

西洋化漸進主義と天皇中心国家構想であろう。主役の居ない政府内で、節目節目で調停役としての正しい行動をした人と言える。鉄道インフラの重要性。時代に取り残されかねない、士族や華族への保護制度化に尽力。明治一四年の政変に際し、木戸、大久保、西郷亡き後の政権に、伊藤博文を中心に考え、病気で京都に療養中も憲法調査に欧州に送り出した憲法の行く末に心を残しながら、五九歳、癌でなくなった。

読み切れないほどの数々の建言書を残した人である。革命の後はそれを維持することが大切で、それに精神誠意腐心した人。

（文責：小野博正）

坂本一登氏の記念講演

出版記念パーティ

日比谷図書文化館地階のライブラリーダイニングHIBIYAに場所を移し、約七〇名の参加を得て、賑やかに出版記念パーティが行われた。

泉代表は開会挨拶で、ミネルヴァ書房の「岩倉使節団の群像」に続けて、サンプル本ンを示しながら、シンポジウムの報告書も近く出版されることになったことは、まことに意義深く、皆様のご尽力に感謝するとの発言があった。

記念講演会に聞き入る参加者

出席者を代表して近藤誠一元文化庁長官からご挨拶をいただいた。さらに福川伸次東洋大学理事長に乾杯の音頭をとっていただいた。その後、毎日新聞編集委員森忠彦氏、ミネルヴァ書房の第二編集長、田引勝二氏（今回の本を担当されご尽力いただいた方です）らからスピーチをいただき、盛会のうちにお開きとなった。

（文責：塚本弘）

乾杯の音頭は福川伸次氏

元文化庁長官
近藤誠一氏

閉会の挨拶
塚本副理事長

ミネルヴァ本と報告書のサンプル本

ミネルヴァ書房
田引勝二氏

毎日新聞編集委員
森忠彦氏

☆新会員自己紹介☆

鈴木瑠璃子

父方の祖母の父親が、ドイツ語専門の中助教として使節団に随行致しました。近藤昌綱の曾孫であり、事務局・近藤義彦様は、また従兄弟になります。仙台在住で、長らく主人の介護に追われておりましたので、当会にはご無沙汰致しておりました。やっと自由に出歩けるようになりましたので、これからは務めて出席したい、と思っております。私は一度この曽祖父についてまとめようと思い立った事もありますが、津田塾大学・東北大学修士・筑波大学博士の学歴ですので、英語はともかく、ドイツ語は駄目で、断念致しました。最近日本のドイツ学の先達として昌綱再評価の兆しもみられます。どなたか、この仕事をお引き受け頂けないか、とも願っております。

綿貫健治

「歴史との対話」に魅せられて。大学時代にE・H・カーの「歴史とはなにか」を読み感激したが、就職してから歴史に正面から向き合うことはなかった。しかし、欧米での駐在経験をつみ年輪を重ねてくるとカーの言う「歴史とは現在と過去の対話である」という意味がよく分かってきた。

だいぶ前から弟と歴史研究会を作り明治維新の立役者の軌跡や遺跡を追っていたのでなおさらである。しかし、その弟が昨年脳溢血で倒れ研究パートナーを失った。そんな時HPで「米欧亜回覧の会」を知った。「歴史との対話」は会に入ってからますます面白くなってきている。今の楽しみの一つは時々彼の病院のベッドサイドで開く二人だけの研究会である。

青山霊園の岩倉使節団関連志士の墓めぐり

四月二日会員有志一一名が、朝の九時半に青山霊園管理事務所前に集まって岩倉使節団関連志士たちの墓めぐり（墓マイラー）が開催された。時あたかも桜花爛漫、散策に程よい日差しの中、風もなく絶好の墓参日和となった。

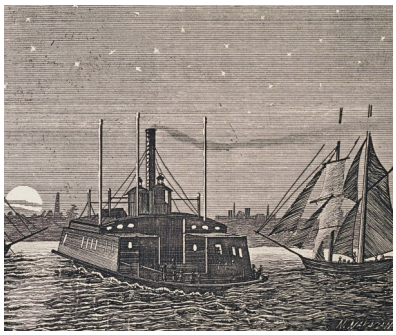
企画発案された吉原重和氏のご努力で、四〇名の使節団がらみのお墓が散在することが特定された。然し、青山霊園は実に広い。墓の在り処の番地がわかっても簡単には辿りつけない。みんなで手分けしつつ、和気藹々ながらも四苦八苦して探し当てるのも探偵団のようで見つけると達成感がある。

結局、半分ほどの墓を見つけたところで予定時間となり、残りはまたを期することになったが、充実感があった。花と水を用意して廻った。

流石に大久保利通の墓は顕彰碑も含めて巨大で、吉原重俊も丸い墓碑で大きかった。佐野常民も広大な領域を占めていた。外人墓地にはフルベッキ、松野クララ、明治天皇と西郷隆盛の肖像画で有名のイタリア人キッショーネ、そして、日本人として入国できなかったジョセフ彦が祀られていた。寂れた墓や整然とし墓、墓にはそれぞれの人物が辿った人生模様も伺われ、はるかなる歴史をおもった。秋にでも残りの墓を制覇したいと参加者の意見であった。

この日の午後は日比谷図書文化館にて、i-cafe lecture の講演会があったので、日比谷公園の噴水前にて、弁当を広げて歓談した。

（文責　小野博正）



ヂェルシーヨリ新約克（ニューヨルク）ヘノ渡船（『実記』14巻・銅板画）

米欧回覧実記輪読会報告

担当幹事
岩崎 洋三

■一月九日 実記輪読会
第14章　北部巡覧の記　上（吉原重和）

・明治五年五月四日（1872年6月9日）議事堂北の駅（Union station）から寝台車二両で出発した。

米国政府の招待旅行だったので案内役のマイヤース夫妻と娘、上院議員のバンクス夫妻と娘が同行。森弁務使と書記生も途中まで随行。

・五月五日　薄晴　ニューブランズイックで夜が明けた。エリザベス駅で朝食　その後ニューアーク市を通過し六時四五分にジャージーシティー駅着。ハドソン河口のフェリーで対岸のマンハッタンに渡りウエストワシントンの第一六番桟橋に着く。（世界貿易センタービルの近く）その後七時にブロードウェイのセントニコラスホテルに入った。（一〇〇〇室もある大ホテル）

バッテリー地区からブロードウエーの喧騒に驚きながら市場の様子を見た。

午後三時からセントラルパークを回覧し、夜八時にブロードウェイの劇場に行った。

・五月六日　イーストリバー河口から蒸気船でウエストポイントへ向かった。午後四時に学校に到着した。ガトリング砲を見た。

・五月七日　学校見学で生徒の教練、軽砲隊の試験を見た。その後、花火を見てその壮観に驚いた。一〇時に宿に戻った。

彼等はウェストポイントの墓地も見た。

■二月一三日　実記輪読会
第15章　北部巡覧の記　中（吉原重和）

・明治五年五月八日（1872年6月13日）ウエストポイントを発ちコロンビヤ号に乗車してハドソン河沿いに北上。

ＮＹ州の州府オルバニー着、シラキュースを経て午後一一時にナイアガラ村のインターナショナルホテルに着いた。

・五月九日　ナイアガラ回覧。アメリカ滝からゴード島に至る。

カナダ滝近くの博物館見学。エジプトのミイラ（ラムセス一世）見学

夕方フィルモア元大統領をホテルに招き夕食会を催した。

■三月一三日　実記輪読会
第16章　北部巡覧の記　下（吉原重和）

明治五年五月一〇日（1872年6月15日）　ナイアガラのホテルを出発、オンタリオ湖に沿って来た線路を戻る。一〇時にロチェスターを通過、シラキュースを経てサラトガの「グランドユニオンハウス」着

・五月一一日　サラトガ湖を廻り山上で休憩、その後車で薬泉に行く。

・五月一二日　サラトガを出発、ボストンに向かい夜八時にボストン着

・五月一三日　ボストン市内回覧、二時から太平楽会に赴く。

・五月一四日　ボストン港を船で回覧、二時から再度太平楽会に赴く。

・五月一五日　ボストンを九時に発ち昼にスプリングフィールド着、小銃製造場に至る。夜一二時にNYCへ帰着。

・五月一六日　セントラルパーク回覧、夜九時過ぎの汽車でワシントンへ戻る。

＊ホームページの実記輪読会報告・北部巡覧の記にはそれぞれの巻に関する地図や写真等の画像資料も見ることができますので参照してください。

□一月九日 ハリス輪読会

pp. 513-541 (Jan. 26-Feb. 17, 1858)

ハリスは、着任後一年半近くたってから江戸出府を許され、課題の通商条約締結交渉をやっと始めることが出来た。ハリスは安政四年（1857年）一一月江戸に着くと、日本側全権代表井上信濃守（下田奉行）と岩瀬肥後守（御目付）を相手に、通訳のヒュースケンを従えて、翌年一月から二月にかけて一四回の談判を重ねて首尾よく成約し、七月神奈川沖のポーハタン号上で調印に漕ぎつける。

一月二六日の第二回談判から二月一七日の第一一回談判までの部分を輪読した。条約談判はハリスが作成した条約草案を、オランダ語を介して日本語訳を作成した上で逐条的に議論される。日本側全権は保守的な諸大名の説得に苦慮していたことから議論が難航した様子が生々しく描かれている。

開港場数ついては、ハリスが米捕鯨船の便宜も考慮し八港を要求する一方、日本側は三港以上不要と突っぱねたものの、『ここは条約のセバストポール』と踏ん張ったハリスが六港を獲得して決着した。セバストポールはクリミヤ半島の港で、ハリスが日本の港を戦略的に重視していたことがわかる。

キリスト教礼拝問題では、一八五六年一月の日蘭条約で、日本側が出島の建物内での礼拝を認めていたことを事前に調べ、ハリスは外人居留地内での礼拝自由を条約に盛り込むことに成功している。

（岩崎洋三記）

□二月一三日 ハリス輪読会

Journal　5, p p. 541-558 (Feb. 17〜 Feb. 27, 1858)

Fragments, May 15〜June 9, 1858

一月二五日に始まった日米条約談判は二月二七日の一四回をもって議了し、ハリスは条約浄書を日本側に渡す。本書がカバーするのはここまで。ハリスは直後体調を崩し静養のため下田に戻った。

幕府は六〇日以内の調印を約したが、条約勅許申請が認められず遅延するが、無勅許調印を決意した幕府は、七月二九日神奈川沖に来航したポーハタン号上で調印に応じることになる。

直前に下田に入港した軍艦ミシシッピー号からハリスが入手した、「英国がインド反乱（セポイ（ジハーヒー）を鎮圧した」、あるいは、「英仏連合軍が清国を屈服させた（第二次アヘン戦争）」等の情報を知らされ、幕府は列強との条約締結を急ぐことになった。

ハリスは第七条の開港区域に日本側が大幅譲歩したことに驚いている。（岩崎洋三記）

□三月一三日 ハリス輪読会

The Complete Journal of Townsend Harris 読了。毎月三〇ページ弱を交代で音読しながら読んできたが、二四回を要した。読み始めたのは二〇一七年二月、初回ナヴィゲーターは今は亡き小坂田國雄氏だった。

途中息抜きに「The Barbarian and the Geisha」（日本名：黒船）という映画を見た。ハリス役がジョン・ウェイン、下田奉行役が山村聰という、1959年ジョン・ヒューストン監督作品だ。病弱のハリスを演じるにはウェインはどうもという意見もあったが、下田の玉泉寺で通訳のヒュースケンと苦労する光景など、大いに楽しめた。

◎斎藤純生氏特別講演　日本文研出版社主で、2001年に『米欧回覧実記』の英訳『Iwakura Embassy 1871-73』を世に出した斎藤純生氏をお招きし、英訳版出版のご苦労や、本にもなっている『洋書流通と翻訳出版の世界』をお話いただいた。当会は英訳実記全五巻を、一一年二カ月かけて読んだのは懐かしい思い出だ。同氏は岩倉使節団の事績を数多くの低開発諸国に知ってもらい参考にしてもらおうと『Iwakura Embassy 1871-73』を数多く寄贈されて来た由で、心強い限りだ。

四から四冊目のテキストとして、William Elliot Griffis, "Verbeck of Japan; A Citizen of No Country" 全三七六ページを読みます。

（岩崎洋三記）

歴史部会報告

担当幹事
小野 博正

■二月二六日
もう一つの明治維新はあり得たのか―徳川慶喜を素材として（小野博正氏）

参加者十六名。

昨年のＮＨＫ大河ドラマ『西郷どん』の徳川慶喜の悪役ぶりに義憤を覚え、慶喜の名誉挽回にと、雄藩による明治維新でなかったら、どんな明治の道があったかを考えてみた。保阪正康氏によれば、四つの可能性があった。①帝国主義的国家（これが大日本帝国憲法となった現実の歴史）②帝国主義的道義国家③自由民権国家④連邦制国家である。

明治新政府が天皇大権の帝国主義国家を選んだのには必然性があった。王政復古で幕府を朝敵にした時から、国民国家の実現には、天皇を中心に置くしか道はなかった。岩倉使節団はアメリカで共和制国家をみたが、これは幕藩体制を思わせる形態と思えたろ

う。イギリスの立憲君主制は理想的にみえたが、時あたかもヴィクトリア女王の権勢が議会に削がれかけていて、これでは天皇の地位がいつ弱められるかわからない不安があった。

フランスの王政と共和制の揺れ動きは不安定だ。一方普仏戦争でフランスを破ったドイツは、ビスマルクとモルトケを従えて、ヴィルヘルム一世皇帝の遅れてきた帝国主義国家は産業革命にも成功して盤石であった。明治六年と明治一四年の二つの政変を経て、ドイツ模倣国家への道は確定した。士族の反乱などを恐れて、讒謗律、集会条例、保安条例などで自由民権運動の広がりを徹底的につぶしたので、自由民権国家はあり得ない。

帝国主義的道義国家は、明治天皇がイギリスの立憲君主制に一時期共感していたので可能性はあったがこれも日の目を見ることはなかった。残る、連邦制共和国国家は、江戸幕府がそのまま近代化に進んだとき、その可能性が高かった。大政奉還のとき、慶喜は選挙による雄藩とその家臣による二院制議会と、大統領制を頭において西周や津田真道らに検討させていた。これが実現していたら、緩やかな近代化もあり得た。

最後に、慶喜である。味方になるべき四侯会議で、四侯を大バカ者呼ばわりして敵に回し、思想的倒幕派であった勝海舟を、幕府最後の終幕に起用したのはなぜか。慶喜自身が、倒幕（終幕）を当初から考えていたとすれば、すべてが腑に落ちる。彼は側近に、三〇〇年の幕府もあと一年も持つまいと語っており、旗本が戦うことを忘れて居ることを嘆いていた。将軍職辞退も恐らく本気だったのではないか。何せ、水戸家家訓は、将軍家に弓を引いても、朝廷には弓を引くなである。彼の血には、武士と公卿の血が流れている。徹底恭順して、明治になってからも、全く政治を語らず、己を語らず。只ひたすらに趣味の世界に没頭したのは、無言のうちに、そのことを語ってはいまいか。これは歴史専門家が決して語らぬ見方である。

■三月三一日　幕末・維新期の中国人米国留学生と日本人留学生（講師：亜細亜大学　容應萸教授）

当日が亜細亜大学教授としての最終日にあたり明日からは名誉教授に就任される本会会員の容先生に幕末・維新期における日中の米国留学生の交流及び比較についてレクチャーして頂いた。

先生にお願いして中国人留学生の郎琅さん、王雨芊さんが参加し、容先生含めた二〇名の参加者の内女性は六名だった。

清政府は一八七二年から四年連続、毎年三〇名（計一二〇名）の官費留学生「留美幼童」を米国に派遣した。この派遣計画の立案者であり、初代「幼童出洋肄業局副委員」（留学生副監督）を務めた容閎は中国人としてはじめて米国の大学を卒業した中国人留学生である。

研究を始めた動機はサミュエル・W・ウイリアムズ、S.R.ブラウン、B.G.ノースロップと中国人の容閎、「留美幼童」そして吉田松陰、芦原周平、国友滝之介、山川捨松との関係に興味を持ったからである。

（研究の目的）

一．米国人と日中両国の留学生が繋がりを持った背景や経緯を明らかにする。

二．日中留学生の間に交流・交友関係があったかどうか、その原因は何であるかを考察する。

三．同時代にイェール大学にいた日中留学生を比較し、両国が近代化において「同じ出発の時点」に立ったといえるかを検証する。

更には米国人と日中両国の留学生が繋がりを持った背景や経緯を明らかにし、日中留学生の間に交流・交友関係があったかどうか、その原因は何であるかを考察する。又、同時代にイェール大学にいた日中留学生を比較し、両国が近代化において「同じ出発の時点」に立ったといえるかを検証する。

（日本人留学生と中国人留学生の比較）

・渡米時の年齢と動機

日本人学生の平均年齢：20.2歳で留学動機は日本の近代化、中国人学生の平均年齢：12.9歳で留学動機は本人の見識よりは親・保護者の考え、西学習得による社会地位の上昇だった。

・帰国後の職業

挙国一致で近代化を急ぐ日本では帰国留学生がすぐ要職につくことができたのに対し、中国では一部の洋務担当高官の配下となって働いたのであった。留美幼童が権力の中枢に近づくことができたのは20世紀に入り、清政府が新政の実行に踏み切ってからである

（今後の課題）

一．新しいコミュニケーションの土壌があったにもかかわらず、日中両国の留学生により深い交流や連帯がみられなかったことが、その後の日中関係の発展とどのようなかかわりがあったかを知る。

二．同じ出発点に立っていた留学生を有しながらも、中国の近代化事業は日本に遅れを取っていた。このことが、日本と中国の近代化の比較に、どのような意味を有したかを探りたい。

（質疑応答）

日本人留学生と中国人留学生の差は何故生じたかという疑問に対しては中国の場合は中華思想の影響で海外から学ぶものは少ないという認識だったのでは、あるいは科挙が実施されて居たので留学の重要性が少なかったという意見が出た。

他方日本は近代化が急務だったので多くの海外留学生が新政府に登用された。

留学生から見た日本人観として、本音と建て前が違うのではないかという耳の痛い指摘があった。

（まとめ）

今まであまり知られて居なかった幕末・維新期の日本と中国の留学生の交流について知る機会を得た事は貴重だった。

先生が実際に歩かれたニューヘヴンの山川捨松のステイ先から永井繁子のステイ先までの地図や当時の家、ブラウン牧師の墓など多くの写真を見せて頂き当時の留学生達の思いに心を馳せる事が出来たひと時でした。

（文責　吉原重和）

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事
畠山 朔男

■二月九日 Open Government, Open Data. Open Governance」（講師：奥村裕一氏（東大公共政策大学院教授、元通商産業省官僚）

一）オープンガバメント

近年世界各国でインターネットの双方向性を活用することで積極的な政府・地方自治体の情報公開（オープンデータ）や行政への市民参加を促進する「政府のオープン化（オープンガバメント）」が急速に進展している。講演はオープンガバメントの歴史から始まった。インターネットの普及を背景に米国のオバマ政権（二〇〇九年）の初署名がオープンガバメントのきっかけを作り、その実施について三原則が策定された。

①行政の透明性　②国民が行政に参加　③行政と国民が協働

この制度で強調されたことは米国の民主主義の強化と政府の効率性や有効性の向上であり、このトレンドはこれからの政府と行政のあるべき姿として世界的に受け入れられた。特にＥＵや日本でも「オープンガバメント」を積極的に推進している。

二）オープンデータ

行政が持つデータを民間へ積極的に公開する流れが急速に高まっている。行政が持つデータは個人情報など情報公開法で不開示となっている情報を除き、全て市民と共有する。これがオープンデータの原則である。二〇一三年Ｇ８サミットで「オープン・データ憲章」が合意された。オープンデータは世界の潮流になっている。

オープンデータの基本形は①オープンデータを政府・自治体の標準とする②データの量と質を改善③全ての者に利用可能とする

その目的は、データを公開することは民主主義プロセスの強化であり、民間のデータ活用はイノベーションにつながり、産業育成になる。

日本政府は平成二八年度に「官民データ活用推進基本法」を定め、政府及び地方自治は「オープンデータ」に取り組むことが義務づけられた。この取組により、国民参加官民共同の推進を通じて諸課題の解決、経済の活性化、行政の高度化、効率化などが期待されている。近々、次期国会に向けて「デジタル・ファースト法案」が検討されており、今後デジタル化が急速に進展することが予想される。

三）ポリシーラボのアプローチ

「オープンガバメント」を実現するための新しい政策形成の手法である「ポリシーラボ」が潮流になっている。英国、デンマーク、米国でこの手法が普及しており、日本も導入を考えている。行政の政策形成の新しいアプローチで「デザイン思考」と言う新しい手法で課題解決を考える。「デザイン思考」とは人間中心デザインのプロセスを行政サービスの経営に取り入れ、行政サービスをより人にとって共感を得られるサービスにデザインすることである。ポリシーラボの考え方は日本の地方自治体にも影響を与え、滋賀県は行政運営の政策形成にデザイン思考を活用している。県知事が率先して「県民の本音を起点にした共感に基づく政策形成」を小冊子で発表している。

四）オープンガバナンス

奥村先生が自ら実践している地方自治体がオープンデータを活用し、地域課題を解決するコンテスト「チャレンジオープンガバナンス（ＣＯＧ）」が二〇一六年から毎年開催されている。全国の地方自治体から市民/学生に解決してほしい地域課題を募集し、デザイン思考やデータ分析を活用して課題を掘り下げ、自分達で解決策に取組むことを基本としている。二〇一八年度は三八自治体から応募があり、今年の三月に最終公開審査と表彰が行われる予定。過去のコンテストで入賞した色々な解決アイデアが披露され、中でも川崎市の地域全体で子育てを応援する街作り「ファミリーサポートから里親へ」の感動的な課題解決の話は印象に残った。今年も素晴らしい課題解決のアイデアが出ると期待している。

（文責：小泉勝海）

i-café-music&lecture 報告

担当幹事
植木 園子

■一月一三日 i-café-music@響 ネットワークという未来

☆第一部「映像とお話」

プリンストン大学名誉教授マーティン・コルカット先生がいらっしゃったので、急遽映像に代えて岩倉使節団のアメリカ訪問を短時間語っていただいた。次いで、朝日新聞OB服部桂さんのメイン講演『ネットワークという未来』。

服部さんはインターネット以前の社会でのメッセージ伝達の進化、インターネット誕生してからの五〇年、インターネット以後の世界にまたがる長いレンジでのメディアの進化とパースペクティヴを、五八コマのパワーポイントを駆使して分かり易く説いた。

Asahiパソコンの立ち上げやインターネット記事連載に関わる一方、その世界では有名なMITのメディア・ラボに特別研究員として三年間身を置いた方で、インターネットを語るに最も相応しい方の一人だろう。

米軍中心に開発されたAPRAネットでインターネットが誕生して五〇周年だそうだ。同じ年にアポロ一一号が宇宙の暗闇に浮かぶ地球の写真を送ってきたが、それを見たスティーヴ・ジョッブスが、世

芳野まい氏（左）と服部桂氏（右）

界の人をネットワークで繋いであげようと一念発起し、数年後パソコンを開発、後スマートフォンを世に出してあっという間にインターネットの大衆化を実現した話には感銘を覚えた。

この日は、服部さんの訳書『〈インターネット〉の次に来るもの～未来を決める12の法則』を読んで服部さんを講師に推挙して頂いた仏文学者芳野まいさんが、インタビューワーを買って出て、興味と理解が一段と深まったのは望外の喜びでした。

☆第二部　ミニ・コンサート

ソプラノ中澤孝子さんが『エビータ』を中心にブロードウェ・ミュージカルの歌を披露。i-Café Singers も頑張ってバックコーラスを歌わせていただきました。

（岩崎記）

ソプラノ中澤孝子さんとi-Café Singers

■三月一〇日i-café-music@響
EUに学ぶ外国人労働者の問題点

☆第一部「映像とお話」

DVD第七章「小国の智恵」を見た後、毎日新聞編集委員森忠彦氏に、EUの外国人労働者の背景や歴史、問題点などをお話しいただいた。

シリア等から大規模難民が押し寄せる欧州各国は、雇用・宗教問題が深刻化し難民受け入れに消極姿勢に転じている。一方、生産年齢人口の減少から労働力不足に見舞われている日本は、昨年末改正入管法を成立させて、外国人労働者を増やす姿勢を明確にした。近隣住民との摩擦や、社会福祉問題・移民問題も含めて、問題深刻化を回避するには、相互理解・共存が不可欠と結んだ。

☆第二部ミニ・コンサート

「あの山を越えて」のテーマでゲーテの教養小説「ヴィルヘルムマイスターの修行時代」の中のミニヨンの歌「ただ憧れを知る者だけが」を歌詞にした異なる作曲家による歌曲を、森美智子さん武藤弘子さんのソプラノで聴き比べた他、「サウンドオブミュージック」から「エーデルワイス」「クライム エブリ マウンテン」をi cafe singersも加わって歌い、ヨーロッパの人達の、山を越えた所にある遠い異国への憧れの気持ちに思いを馳せた。（岩崎記）

■四月二日i-café-lecture
平成政権史-そして安倍政権の今（講師：芹川洋一氏　日本経済新聞論説フェロー）

芹川氏は、折角政権交代を実現した民主党が政権運営に失敗して政権の座から滑り降りた後、野党が民主勢力の結集叶わず弱体化し、自民党長期政権を許容したという。現在の五政党の体制は、昭和の自民、社会、公明、民社、共産とほとんど一緒とし、自民党長期政権化の五五年体制に戻ったともいう。そして、野党が旧体制を打破できるか否かは、今夏の参院選で野党が結集して一人区を制することが出来るか否かにかかっていると。

平成の政治に大きなインパクトを与えたものとして、芹川氏は小選挙区制の導入、上級官僚任免権を含む強すぎる官邸、政治資金規正法に伴う派閥の勢力後退で、養成機能が衰え国会議員の専門性が低下、地方議員が相対的に優位に立つ局面のが目立つようになったと。もし、野党が今後もバラバラのままだったら、待っているのは辞世の句のみと厳しくむすんだ。

講演後の質疑応答に丹念にお答えいただき、セッションが四〇分も続いたのは近来稀だった。それほど、お話が具体性を帯びて分かり易く、真剣な議論を呼び起こしたということだろう。芹川氏がお帰りになった後も、打ち上げでホットな論議が続いた。

（文責：岩崎洋三）

芹沢洋一氏

■i-Café　大仏次郎『天皇の世紀』を見る会　終了報告

『天皇の世紀』は朝日新聞が明治一〇〇年に因んで昭和四二年に連載をスタートさせた大仏次郎の「史実と信ぜられるものに従い、克明すぎると自分でも見るくらいに、事実のブロックを積み重ねて行って、それがどんな意味を物語っているかを書き綴った」長編で、後に朝日放送で一三話の連続一時間物テレビ映画として放送された。

『見る会』は、明治一五〇年の年に、この『天皇の世紀』を連続で見ながら、明治維新や岩倉使節団の意義を改めて考えようと昨年七月シェア奥沢でスタートした。二回目以降は会場を日比谷図書文化館セミナールームに移し、本年二月の七回目をもって無事終了した。

一時間物のテレビ映画と言う限界は当然あるものの、映像の迫力は絶大で、文字通り生きた歴史を学べた。毎回丹念な説明で理解を促進してくださったナヴィゲーターのみなさんに心から感謝します。

それにしても、大佛次郎が筆半ばで倒れ『天皇の世紀』を完結できなかったことが心残りです。

（岩崎記）

＊天皇の世紀タイトル一覧

第一話　『黒船渡来』～太平の眠りを覚ます四隻の黒船、第二話　『野火』～変革の種を蒔いた吉田松陰、第三話　『先覚』～砲術開祖・高島秋帆の執念、第四話　『地熱』～日米修好通商条約締結の波紋、第五話　『大獄』～安政の大弾圧と桜田門外の変、第六話　『異国』～咸臨丸による太平洋横断の船旅、第七話　『黒い風』～相次いで起こるテロリズムの嵐、第八話　『降嫁』～公武合体に暗躍する人々、第九話　『急流』～寺田屋事件の裏で起きた悲劇、第十話　『攘夷』～生麦村で白昼起きた異人斬り、第十一話　『決起』～奇才・高杉晋作の短すぎた生涯、第十二話　『義兵』～土佐勤皇党の斃れた志士たち、第十三話　『壊滅』～時流に乗り遅れた天狗党の悲劇

催し案内

2019年
（平成31年）
（令和元年）
4月～7月

☆年次総会および 岩倉使節団一五〇周年に向けての方針を論じる会

四月三〇日（火）
〔年次総会〕 13：30～
〔論じる会〕 14：20～
〔会場〕日比谷図書文化館 四階小ホール（スタジオプラス）

☆米欧回覧実記輪読会

五月八日（水）
第18巻フィラデルフィア府ノ記（岩崎洋三）

六月一二日（水）
第19巻ニューヨーク府ノ記（未定）

七月一〇（水）
第20巻ボストン府ノ記（未定）

＊13：10～14：50 日比谷図書文化館四階セミナールーム
会員600円（非会員800円）

☆フルベッキ輪読会

五月八日（水）
Ch. Ⅱ The Koppel(pp. 29-47)（市川三世史）

六月一二日（水）
Ch. Ⅲ In the Land of Opportunity(pp. 48-68)（未定）

七月一〇（水）
Ch. Ⅳ A Glance at Old Japan (pp. 69-79)（未定）

＊15：00～17：00 日比谷図書文化館四階セミナールーム
会員600円（非会員800円）

☆歴史部会

五月二〇日（月） 13：30～17：00
〔演題〕ジョン万次郎を語る－「漂巽紀畧 ひょうそんきりゃく 全現代語訳（講談社学術文庫）」発刊を期に」
〔講師〕北代淳二氏、谷村鯛夢氏
〔場所〕国際文化会館404号室

☆グローバルジャパン研究会

六月一五日（土） 13：30～16：30
〔演 題〕“Flawed Giant-Lyndon Johnson”欠陥のある巨人。リンドン・ジョンソン大統領
〔講師〕大井孝氏（東京学芸大学名誉教授）
〔場所〕国際文化会館401号室
〔会 費〕1,000 円（会 員）、1,500円（非会員）

七月二〇日（土） 13:30~16:30
国際文化会館401号室
〔演題〕未定
〔講師〕芳野あき氏（コロンビア大学メールマン公衆衛生大学院、公衆衛生修士）

☆i-café-music @サロンガイヤール四谷

五月二六日（日） 14:00～17:00
〔お話〕岩倉使節団も味わったベルギービールの話（門司健次郎元カナダ大使）
〔♪〕五月には歌が溢れ
〔交流会〕ベルギービールと軽食（会員2,500円）

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣 旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会 員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例 会　年に4回、全体例会があります。

部 会　テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウム等を行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役 員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会 費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」事務局　近藤義彦
〒181-0012
東京都三鷹市上連雀 1-1-5-707
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL 090-2658-1423

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。
年会費などのお支払いは下記口座をご利用ください。
ゆうちょ銀行
振替口座（当座預金） 00180-0-635365 店番:019
総合口座（普通預金） 8804433 店番:018
三菱UFJ銀行 222-（普通）0544121

特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

歴史に学び、未来を考えませんか？

NPO法人米欧亜回覧の会 公式ホームページ

http//www.iwakura-mission.gr.jp

Facebook

Iwakura Mission Society 岩倉使節団・米欧亜回覧の会

編集後記

◇四月の年次総会の日が平成最後の日で、翌日から令和となり、今号は、ぎりぎり平成年間の発行となります。年号が変わるだけですが一号からすべて平成の日付の発行であり、やはり大きな時代の変わり目と感じます。

◇縦書きのＮＥＷＳは、漢数字を四桁の年号以外は千、百、十を使って表記していましたが、今号から、グランドシンポジウムの記録（ミネルヴァ本）と報告書に合わせ、千、百、十などは使わない数字だけの表記に統一します、従来は「平成三十一年」としていましたが「平成三一年」となります。

◇二月二四日に、当会とも縁の深いドナルド・キーン氏が亡くなりました。「百代の過客」という平安から徳川までの日本人の日記をとりあげた「日本人論」の著書がありますが、その続編では幕末・明治に欧米に派遣された使節団の日記がとりあげられ、米欧回覧実記も含まれています。三頁の実記輪読会報告（北部巡覧の記）は、日付ごとの記述ですが、ホームページでは、地図、当時の画像そして現在の写真などの画像資料を同時にみることができます。資料の共有は格段に便利となりました。（N）